

11・4「持たざる者」の国際連帯行動へ

生存権を脅かす社会的排除に抗し 居住権を掲げ公正な連帯社会を

社会的排除を拡大する 「ホームレス特措法」 の欺瞞を撃て!

厚生労働省は8月28日、いわゆるネットカフェ難民(厚労省の言い方は「住宅喪失者」)実態調査報告として、推計5400人と発表する。その存在を公認した。9月13日にはフルキャストの日雇派遣に日雇雇用保険適用を発表。7月参院選での自民党の大敗(2001年来の小泉「構造改革」路線の下で構造化した格差拡大への審判)に対応した結果である。

格差社会の下での貧困への対応が不可避となる中、反排除・反グローバル化社会運動が「反グローバル化」運動後進国「日本」で確立し得るかどうかが、その真価が問われている。

ホームレス全国実態調査の責任者でもある岩田正美さんは「現代の貧困」(ちくま新書)で「路上ホームレスの3類型」として、①最長職は一応安定した常用職で、路上ホームレスとなったタイプ(安定型35%)、②路上直前には職場の提供を労働者側が、そこから路上に出たタイプ(労働者側型29・7%)、③不安定職を転々と、住宅も不安定であった人々(不安定型35・3%)と、「ホームレス特措法」の下で策定され、社会的排除を強化

拡大する3分類(就労意欲を基準とした排除を正当化する)就労意欲のある者、福祉などの援助が必要な者、③社会生活から逃避している者)とは異なった実情に即した類型、とりわけ「労働者側型」の存在を「貧困に縛りつける『装置』」と規定している。元々、社会保障が薄いつだけ多くを民間(企業)に依存してきた日本の社会保障体系の中で、居住の権利は本来は社会保障の要として位置付けられるはずであるが、権利の主張としても弱いままだ。

拡大する3分類(就労意欲を基準とした排除を正当化する)就労意欲のある者、福祉などの援助が必要な者、③社会生活から逃避している者)とは異なった実情に即した類型、とりわけ「労働者側型」の存在を「貧困に縛りつける『装置』」と規定している。元々、社会保障が薄いつだけ多くを民間(企業)に依存してきた日本の社会保障体系の中で、居住の権利は本来は社会保障の要として位置付けられるはずであるが、権利の主張としても弱いままだ。

7月参院選での自民党の大敗(2001年来の小泉「構造改革」路線の下で構造化した格差拡大への審判)に対応した結果である。

格差社会の下での貧困への対応が不可避となる中、反排除・反グローバル化社会運動が「反グローバル化」運動後進国「日本」で確立し得るかどうかが、その真価が問われている。

ホームレス全国実態調査の責任者でもある岩田正美さんは「現代の貧困」(ちくま新書)で「路上ホームレスの3類型」として、①最長職は一応安定した常用職で、路上ホームレスとなったタイプ(安定型35%)、②路上直前には職場の提供を労働者側が、そこから路上に出たタイプ(労働者側型29・7%)、③不安定職を転々と、住宅も不安定であった人々(不安定型35・3%)と、「ホームレス特措法」の下で策定され、社会的排除を強化

現在の日雇 野宿者運動

小泉構造改革(新自由主義政策)を通じた格差拡大と貧困の構造化に抗する時に、グローバル化が①国民性、②規制緩和、③社会福祉削減を三位一体とする新自由主義政策に基づいて推し進められていることを忘れてはならない。

反グローバル化運動後進国日本にとって、格差問題の日本に於ける格差と貧困の問題が所得格差と安部 放り出し「辞任」が福田「泥船」政権という今こそ「戦争とグローバル化」に抗する新しい社会運動の真価が問われる時である。

同時に、貧困が課題となった時に支配者は「平和かパン(めし)か」の選択を民衆に迫り、貧しき民衆を戦争へと動員してきた負の歴史を忘れてはならない。

12月には、昨年7月に続いた日米安保体制下で基地を押しつけながら、「平和X」のメンバーを迎えての連帯の取り組みも予定されている。分断の壁を乗り越え不正極まりない選択肢を、越境する「持たざる者」の連帯の前進を、

(荒木 剛)

書評

生田武志

ルポ 最底辺

不安定就労と野宿

(ちくま新書)

「野宿者問題は、日本では20世紀末に一気に社会問題化した。そして、90年代前半までの日本の野宿者のほとんどすべては日雇労働者であった。日本最大の「寄せ場」である釜ヶ崎には今も万人以上の日雇労働者が生活し、日本の野宿者問題の中心地となっている。ぼくは1986年から20年間、その釜ヶ崎で主に日雇労働者として働きながら日雇労働と野宿の問題に関わり続けてきた。

野宿者問題は変容し続けいまや野宿者の大多数は日雇労働を経験していない人たちとなった。そして、野宿者は次第に「高齢化」と「ネットカフェ難民がそうであるように」「若年化」の二極化をたどってきた。「いま、400万人を越える」といわれる多くの若者がフリーターとして不安定な雇用形態で将来が見えないまま働いている。では釜ヶ崎や山谷で暮らす「究極の不安定就労」としての日雇労働者はどうに働いていくか、そしてどのように「究極の貧困」である野宿へとなっていくのだろうか。

そしていま、3万人近い日雇の野宿者ほどのような状況で生活しているのだろうか。それを、ぼくの20年間の経験から話していこう(はじめに)「格差社会」論から「貧困」問題トワークシヤプア論と、研究者による調査・分析から労働組合運動のウハウまで、この分野で多くの本が刊行されている。本書もそうした時流に乗った本かと思われ、取り扱っている上で不可欠なポイント

8月24日、釜ヶ崎パトロールの会のメンバーが突如大阪府警に今状逮捕された(9月5日に尊厳)。容疑は「道路運送車両法違反」という聞き慣れないもので要するに、ディーゼル車の排気ガス規制に触れたというのだが、通常は「指導・警告」で済む話で、しかも去年の案件である。それを今状逮捕の上で、10日間の拘留がつけられ、自宅や勤務先など3カ所の方針入れも強行された。この暴挙を怒りを込めて弾劾する。この逮捕が8月25日の世界陸上大会開会式の前日に強行されたことは、明らか

である。また2年連続の大阪市による強制排除や今年派遣労働に従事することで不安定就労をめぐる状況を「実感をよまされた」として洞察する。最終章の「野宿者問題の未来へ」は、社会システムのある方の転換と、「生の尊厳」を取り戻すことに力点が置かれている。著者の思いは、「野宿者問題は日本社会と世界の様々な問題と可能性を映し出す『鏡』なのである」「釜ヶ崎や野宿者に関わるこうした活動は記録も掲載」が既にあり、「最底辺」では襲撃の要因として行政や地域住民の排除・排外の問題にも言及している。

生田氏は「女性と若者が野宿者になる日」の章では「日雇労働で働き、日払いのドヤ(Hostel)ハウス」やネットカフェやマクドナルドで夜をすごして生活するこれらの若者たちは、釜ヶ崎で生活する日雇労働者の21世紀バージョンを投じてはならない。

生田氏は「女性と若者が野宿者になる日」の章では「日雇労働で働き、日払いのドヤ(Hostel)ハウス」やネットカフェやマクドナルドで夜をすごして生活するこれらの若者たちは、釜ヶ崎で生活する日雇労働者の21世紀バージョンを投じてはならない。

10・7三里塚へ!

暫定滑走路北延伸阻止
市東さんの農地を守ろう
憲法改悪絶対反対
成田を軍事基地にするな

10・7 全国総決起集会

日時: 10月7日(日) 正午
会場: 成田市東峰 反対同盟員所有地
主催: 三里塚芝山連合空港反対同盟

11.4 「持たざる者」の国際連帯行動

●11月4日(日) 午後1時30分
代々木八幡区民会館
●代々木八幡区民会館
●小田急線代々木八幡駅・千代田線代々木公園駅下車 集会後、デモ

10.20 プレ企画

●10月20日(土) 午後1時
●大久保地域センター(新大久保駅下車)

今、問われる新自由主義
グローバル化との闘い
発題・小倉利丸

世界陸上大会前に予防拘束=逮捕 大阪府警の不当弾圧許すな